

身の回りの総会屋

あなたは暴力的脅迫と闘えるか

盛田 常夫

総会屋はどこにでもいる

総会屋を特別のグループと考えたら大間違い。株主総会を取り仕切るだけが総会屋ではない。組合紛争、地域紛争、大学紛争など、紛争処理にお金が絡めば、そこに「総会屋」なる機能をもたらす集団が現れる。あなたの町も、会社も、総会屋（暴力団）と直面する事件は起こりうる。われわれは総会屋と闘う勇氣と力を持っているだろうか。

私は東京の私立大学に16年奉職したが、その半分以上の期間、教授会の総会屋担当だった。大学の総会屋とは集団的な威嚇で大学から利権を取る連中である。私は団塊世代で、大学「紛争」世代。これを「全共闘」あるいは「闘争」と名付けるか、「紛争」と名付けるかは、あの期間の評価にかかわっ

ている。私の評価ははっきりしている。あれは「闘争」なんかじゃない。ただの「紛争」。学生運動は1960年の安保闘争以後、年々質が低下し、暴力的色彩を浴び、それにつれて哲学も理念もなくなった。全共闘運動に参加したほとんどの連中は、ベトナムにも安保にも関心はなかった。だから、安保自動延長やベトナム戦争は全共闘運動とは何の関係ない。まともな学生運動は1960年で終わっている。内容のない、ただの烏合の衆の運動が全共闘運動。だから崩れるのも速かった。

崩れた後はただの暴力集団に四分五裂。大学の総会屋に転落した集団や内ゲバに走る集団から赤軍のように海外へ出るテロ集団いたるまで、バラバラ。ゲバ棒を持ってデモについて回り、大学を破壊し歩いた無責任な追従者は卒業したら唯の人。

大学の総会屋

1970年に卒業した友人の多くは

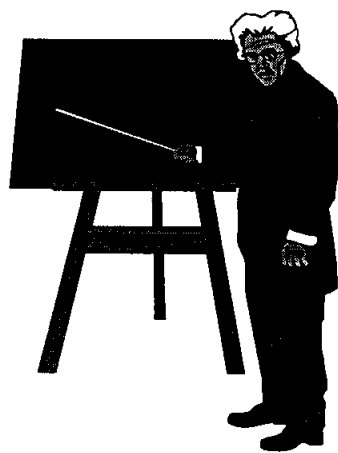
民間会社への就職を嫌い、大学院へ進学した。その世代が大学院を卒業して大学の教員になりはじめたのが1975年以降。私が1975年に専任講師に採用された大学は中核派の全国拠点で、黒ヘルメット、赤ヘルメットの拠点でもあった。すでに紛争が終わって5年も経つのに、この大学ではヘルメットと覆面をした連中が昼間からキャンパスを跋扈している。教授会メンバーとしての最初の仕事は、中核1革マル戦争の構内警備。教授会の議論の3分の2は自治会への対応と自治会費の支払い問題。

この大学のどこかが腐っていた。面白いことに、大学紛争を経験した若手教員は当時の所属派閥にかかわらず、ほぼ一致して「全共闘運動は不毛だった」という否定的な評価で一致していた。ただ、紛争当時に教員だった古手の先生方は、当時の恐怖の体験が忘れられず、学生には手を付けられないというのが実態だった。そこで、自然と大学紛争を経験した若手教員が、自治

会担当者になった。蛇の道はへび。

個別の教授会には自治会担当責任者が、全学の責任者として学生部長がいる。学生部長を支える実務機関が学生部。これはいわば会社の総務部。個別自治会は教授会が、自治会の連合体は学生部長が対応する。この大学では大学決定で気に入らないことがあると、ヘルメットをかぶり、覆面をし、竹竿を持った集団が学生部に押し掛け、学生部長をキャンパスに引き出し、机の上に座らせ、教時間、マイクを突きつけて「団交」させていた。最後には1枚の紙に確認書を書き、学生部長は解放される。学部長会議でこの模様が報告され、確認書が紹介されるが、これは正常な交渉の文書ではないとして、無視される。

1980年を過ぎても、この光景が定期的に繰り返される大学だった。学生部長は順繰りで学部に割り当てられるが、誰が学生部長になるかは教授会の大問題。もっとも、学生部長を1年やれば、海外留学という暗黙の特典が



あった。部長は教員だから、やばい時には雲隠れできるが、学生部の職員はそういうわけにはいかない。部長がいなければ、担当職員がつるし上げを食う。トップが断固とした態度を示さな

ければ、現場の担当者は暴力集団と仲良くなるしか道はない。これは普遍的な法則。

念のために言えば、当時の黒ヘルメット集団の大部分は各種課外活動クラブに割り当てられた動員学生で、上の指示に従わなければ活動費がもらえないし、期末試験で暴れば試験が中止になるから、各種の威嚇活動に参加するという構造だった。

他方、中核派は革マルとの殺人合戦をしていたので、さすがに新規の学生を調達するのが難しく、中核派の最大拠点といっても1980年過ぎた時点では全学に10名もいなかっただろう。ただし、池袋の前進社から常に中年の連中が配置されており、彼らが裏の世界を取り仕切っていた。これだけ少ないとデモもできないが、三里塚に動員された泊まり込みの連中がいる時はデモ隊となつて、定期的にキャンパスを示威行進するのだが、おじさん、おばさん連中がデモしているわけだから、奇異に見えたものだ。

教授会は利益供与者

大学には利権はあるのか。なければこんな馬鹿なことが続くはずはない。

利権の一つは自治会費、もう一つは課外活動費。両方とも授業料と一緒に、大学が「代理徴収」と称して強制的に学生から集めているお金。授業料と一緒に納付しているので、学生も親も払っているという感覚はない。

自治会費の交付は教授会が学生大会の成立を確認して自治会に引き渡す慣行になっており、課外活動費は学生部長が交付する。3万近い学生がいる大学だから、これはたいしたお金になる。自治会費は一つの学部で年間800万から1200万円。年間の課外活動費は5000万円を超える。

1970年代の後半にはもう一般の学生は学生大会などに関心はなかった。だから、学生大会は成立しない。

中核派は10数名の動員で、3つ4つの学部の学生大会をまとめておこなう。

委任状800名、出席40名という風に

報告書に書いて教授会に提出する。委任状など集める力などありはしない。学生名簿から書き写しているだけ。自治会費の引き上げも、実体のない学生大会のお手盛り作業。

今の大学教員は暴力に弱い。自治会費を交付しなければたいへんなことになるという教授会の学生担当の報告を聞くと、だいたいがびびって「もう出せばいいじゃないか」などという。今はお亡くなりになった某総長がまだ法学部長だった頃、中核派に話を付けられるということを自慢しておられたが、何のことはない仲良くなったただの話。「自治会費を出してやれ」との一言で、仲良くなれるわけだ。この学部にはマスコミでも活躍している立派な先生がいっぱいいるが、自治会費の問題では皆、われ関せずだった。この先生方は「代理徴収」している責任を果たしていなかったのだ。

中核派は授業料紛争になると、総全体を取り仕切る力はなかったが、総

長団交の終わりを取り仕切って帳尻合わせていた。明治生まれの中村哲は総長団交には強かった。5〜6時間休憩なしで一歩も譲らさずばんやり合っている、最後には血圧が高くなったと言っていてドクターストップをかけ、それで終了する。大会社の社長さんには少しは中村哲を見習って株主総会を乗り切ってもらいたいものだが、中核派はここで「仕方がない」という振りをして団交を終わらせ、学生部に恩を売っていた。

ここまでくると大学も落ちぶれたものだ。それもそのはず、社長（総長）を支える経営者がいない。経営能力のない教授から常務理事を選び、これで大学を運営するのだから、無責任にならざるを得ない。誰も自分の任期中に暴力集団と決別しようなどとは思わない。身体を張って奮闘する覚悟がないとできないのだ。キャンパスを閉鎖して、警察警護のなかで授業しなければならぬからだ。この大学はそれを決

断できなかった。

昔ヘルメット今バンド

公然の秘密だが、私が奉職した大学は大学紛争時から算定して、20年近く、年2回の定期試験を正常に行ったことは一度もなかった。試験初日になると、50名から100名ほどの覆面集団がバルサンを炊き、ペンキをもって教室になだれ込み、大学はロックアウトを宣言して、試験はレポートへ切り替え。これを20年繰り返し返してきた。

古い世代の教員にはすでに改革の意欲も能力もなかった。若手教員の層が厚くなった経済学部と社会学部が都内からの移転を決議したのは1982年。移転反対運動が起きる中、ハンガリー留学から戻った私は教授会の自治会担当責任者を例外的に2年務め、キャンパス移転の教授会決定を凌いだ。学生大会で反対派学生への暴力事件が発生したことを理由に自治会執行部を認知せず、自治会費の学生への返還を教授会で決議した。大学紛争以来、こ

の大学では最初の出来事だった。教授会から攻勢をかけることで、学生からの圧力を封じた。一度だけ、移転決定

の教授会会場になだれ込まれたが、座り込まれただけで、暴力的な衝突にはならなかった。学生部の職員から何度か、自治会潰しの張本人として黒ヘルメットが狙いをつけているので注意してくださいと忠告を受けた。経済学部の教員は中核派の脅迫を何度も受けた。学生担当だけでなく、自治会費の支払い決定問題が近づくと、教授会メンバー全員の自宅に電話を入れるのだ。「夜道を歩く時には気をつけろ」と。移転を予定していた学部のうち、経営学部は学生の反対に耐えきれないと判断し移転決議をしなかった。

この2学部が1984年に新キャンパスに移った。移ってから、自治会費の代理徴収制度を廃止するにいたるまで、何度も衝突があった。われわれはジーパンと運動靴、皮ジャンパーで先頭に立った。折角獲得した新天地を汚されてはたまらないと。ここでも、

大学紛争を経験したわれわれの世代が最前線で学生とぶつかった。

もう大学を離れて7年になるが、近頃の若手教員は自分の研究のことしか頭になく、大学の改革に関心がないという愚痴を昔の同僚から聞かされる。平和になればなるで、例の大学教員の脳天気現象が始まる。筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店）の世界である。あれはパロディというにはあまりに現実の世界。それほど大学には脳天気な連中が多い。

それは学生も同じ。新キャンパスにはヘルメット集団に代わって、各種音楽バンドが跋扈している。ただのへたくそなロックバンドの連中が「自主的創造的文化的活動にたいする教授会の弾圧はゆるさない」などと、まったく似つかわない言葉を使い、教室を占拠し、新築のキャンパスをペンキで塗りたてる。時代は変わっても、いつの時代にも甘えた馬鹿者が大きい顔をし、心ある教員が手をこまねくという構図は変わっていない。